

問題・解答
用紙番号

46

の解答用紙に解答しなさい。

国

語

〈受験学部・学科〉

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、
看護学部、農学部（食農ビジネス学科）

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I

次の1～5の傍線部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。（一〇点）

- 1 政府は学問にカンショウするべきでない。
- 2 経済セイサイを加えることが決定した。
- 3 大統領のキョシュウに注目が集まる。
- 4 オリンピックで新記録をジュリツした。
- 5 インスタグラムに写真をトウコウする。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

稲作は、養蚕や畑作などと組み合わせながら、日本列島におけるもつとも主要な生業となった。ずいぶん長い歴史をもち、いくつもの起源神話^Aをもっている。そのうちのひとつが、古事記^{*}に伝えられているオホゲツヒメ(大気都比売神)殺害の神話である。簡略に紹介するが、高天原^{*たかまのはら}から追放されたスサノヲ(須佐之男命)がオホゲツヒメに食べ物を乞う場面である。スサノヲの求めに対して、オホゲツヒメが、鼻・口や尻から食べ物を出して差し出しているのを知ったスサノヲは、わざと汚して差し出したと言って怒り、オホゲツヒメを切り殺してしまふ。すると、殺された食べ物の女神の、「頭^{かしら}に蚕^こ生^なり、二つの目に稲種生^{いねくさ}り、二つの耳に粟生^{あづき}り、鼻に小豆生^{ぼと}り、陰に麦生^{むぎ}り、尻に大豆^{まめ}」が生り出た。そこで、カムムスヒの御祖^{みおや}(神産巢日御祖命)は、それらを持ってこさせて浄化し、改めて種と成してスサノヲに託して地上に蚕と五穀がもたらされた。古事記は、五穀の起源をこのように語っているのである。

頭からカイコが生まれるというイメージには、髪の毛と生糸という連想のほかに、カイコの幼虫とシラミ(虱)との連想が働いているのではないかと想像するが(虱は根の堅州の国のスサノヲの頭にいるが、じつはそれはムカデだったとある)、ここに語られているのはハイヌヴェレ型の穀物起源神話とみてよからう。ハイヌヴェレ型神話というのは、殺された大地の女神の死体から新しい生命、新しい穀物や食べ物が生まれ、そのすばらしい食べ物を人は手に入れることができたと言語する神話をいう。ここでは、そうしたハイヌヴェレ型の起源神話が、五穀と養蚕の起源として古くから日本列島で語られていたという点に注目したい。

この話型は、おそらくインドネシアなど南太平洋方面に源をもつもので、それがユーラシア大陸東岸を伝わって北上してきたものらしい。

古事記の神話では、血にまみれて誕生した蚕と五穀の種は、カムムスヒ(神産巢日命)によって浄化され、スサノヲ(須佐之男命)に託されることで地上にもたらされた。それゆえに、出雲に降りたスサノヲは、高志^{こし}のヤマタノヲロチを退治し、クシナダヒメ(櫛名田比売)と結婚したと語られるのである。なぜなら、クシナダヒメという女神は、「クシ(靈妙な) + イナダ(稲田) + ヒメ(女神)」つまり田んぼの女神だからである。したがって、ヲロチ退治神話というのは、たんに生贄にされそうな少女を助けて結婚するという退治譚だけではなく、クシナダヒメとスサノヲとが結婚することによって地上に稲作が開始されたことを語る、農耕の起源神話になっているとみななければならない。それは同時に、養蚕の起源神話にもなっている。ⁱ

一方、日本書紀の場合は、「大地の母神^{*}生産の女神」殺しは、スサノヲではなくツクヨミ(月夜見尊)によってなされたと伝えている。神代巻の第五段にあるのだが、その神話は正伝にはなく

第一の一書（この段の最末尾）に載せられている。そしてそこでは、月の神ツクヨミがウケモチ（保食神）と呼ばれる食物の女神を殺し、古事記と同じように女神の亡骸からは蚕と五穀の種が誕生する。カイコが生まれるのは、「眉の上に繭生り」とあって、古事記と同じように、眉毛と蚕糸の連想があり、加えて、マヨ（眉）とマヨ（繭）との語呂合わせがはたらいっている。

日本書紀の場合、女神ウケモチを殺したツクヨミの行為を憎んだアマテラス（天照大神）が、弟ツクヨミを嫌って昼と夜とに分かれてしまったという日月分離起源の神話を伝えたあと、アメノクマヒト（天熊人）に命じて、ウケモチの死体から生まれた五穀の種と蚕を持ってこさせて高天原で育てたと語っている。そして、稲は、「天狭田と長田」に植え、蚕からできた繭については、

口の裏に繭を含み、すなはち糸を抽くことを得たり。これより始めて養蚕の道有り。
と伝えている。

このようにして高天原で育てられた稲や蚕は、天孫降臨の際に、地上に降りたニニギ（瓊瓊杵尊）に託され、地上にもたらされることで、日本列島に養蚕や稲作（穀物栽培）が開始されることになったというのが日本書紀の生産起源神話になっているのである。

ただし、その地上への降下も、日本書紀の正伝には伝えがなく、第九段の第二の一書のなかで伝えられている。しかもそこに出てくるのは、高天原で育てられた「斎庭の穂」だけで蚕のことは記されていないのだが、当然、他の五穀とともに養蚕もここに起源があると日本書紀は考えているはずである。それゆえに、近代天皇制のなかで、稲作をする天皇と養蚕を担当する皇后という対の関係が強調されることにもなったと考えるよからう。 ii

このように、古事記と日本書紀とは、稲作や蚕の起源が別のかたちに展開して伝えられているのだが、そのことは、これらの起源神話が多様なかたちで存在したということを教えてくれるだろう。重要なものであればあるほど、その起源は多様になっていくのだと思う。そしてここから、稲作と養蚕が天皇と国家に独占されたものではなく、スサノヲを起源として語られる神話も存在したということを確認できるのは貴重なことである。

たとえば、定例の国家祭祀について記す『律令』や『延喜式』の四時祭をみると、その多くが稲作にかかわる祭祀であるということに気づく。それは、古代律令国家の基盤を支えていたのが稲作であり、公民としての水田耕作民であったという現実的な問題ばかりではなく、稲作が、もつとも強く異界と対峙する行為であったということに起因するはずである。常陸国風土記行方郡の夜刀の神伝承に（１）的に語られているように、自然と神の領域に侵入し、それに立ち向かうのが稲作だから、いつも神に向きあっていなければならなかったのだと言い換えてもよい。その意味で、稲作は神への侵犯という根源的なタブーを抱え込まなければならなかったのである。 iii

古事記や日本書紀に語られているハイヌヴェレ型の起源神話そのものが、大地の女神殺しによって語られているのを見ればわかるとおり、稲作は始まりから、神殺しというタブーを背負っている

のである。それは人類の最初の自然破壊と言ってもよいのが稲作だということを考えれば、必然的に孕まれてくる罪でありタブーであったと考えなければならない。

神の世界に起源をもつ稲種は、スサノヲによって、あるいはニギによって地上にもたらされたと語られるのだが、そこから地上に繁茂することに關しては、次のような神話を見いだすことができる。もともと民間伝承として伝えられていたとみなせる、出雲国風土記に載せられた伝承である。

多禰の郷（略）天の下造らしし大神、大穴持命と須久奈比古命と、天の下を巡り行でましし時、稲種を此処に墮したまひき。故、種といふ。（飯石郡）

オホナモチとスクナヒコの二神が各地を巡行している途中、この郷に稲種を墮したと語られている。この二神は播磨国風土記では稲種を山に積んでいるから（揖保郡稲種山）、異界から稲種をもたらした神として広く伝えられていたとみてよい。そして、ここからわかることは、稲種は神の世界から、神によってもたらされたものだということである。しかもそれは、神が人に授けたものなのではなくて、神が「墮す（落とす）」ことによって人のものになったのだというふうに、その起源が不安定な要素を内包して語られているということに注目したい。ここに、神への犯しという負性を内包した、神の世界の稲種を手に入れた側が必然的に抱え込むことになった稲作のタブー性を読みとることができるだろう。

豊後国風土記の速見郡には、的餅伝承（豊作で心が奢り、収穫した米を粗末にしたために、穀霊が白鳥になって飛んでいってしまったという伝承）も伝えられており、そこからも、稲が神の側のものであるということがよくわかる。ちよつとの油断が、人間から稲を奪ってしまうのである。それは、稲が本来、人のものではないからである。

また、白鳥になった穀霊は、山城国風土記（逸文）によれば、飛んで山の峯に降りると、そこで稲になったと語られている。ここからは、白鳥が稲種をもたらす神でもあったのだということを教えらる。世界的にひろがる穗落とし神話のパターンで、民間伝承として各地に遺っているのだが、その構造は、先のオホナモチ・スクナヒコの巡行による稲種落としの場合と同じである。

古代の文献には見当たらないが、神の世界に漂着した人間が、そこから稲種を盗み出してくると語られる（盗み）による稲作起源神話（沖縄などで広く語られているほか、弘法大師伝説としても各地に伝えられている）には、稲作のタブー性がより鮮明に現れている。^{iv}

なぜ稲種は耕した田に直接蒔かれないで、苗代（苗代田）で育てられるのか。たぶん、稲種のタブー性を（2）し、それを人の側に移す場所として苗代が作られるのである。^E苗代における育苗期間は、神のものを人のものにするための試練の期間であり、その意味で、苗代は神の世界と人間の世界との中間的な場所になる。だから、苗代の期間はことさらに厳しいタブーが課せられることになるのだ。

苗代に蒔かれる種は（斎種）と呼ばれる。万葉集には、

青柳の枝きり下ろし斎種蒔きゆゆしき君に恋ひ渡るかも

(巻一五・三六〇三)

とうたわれている。この歌自体は恋歌だが、上三句の景は、種下ろしの儀礼にかかわる表現とみて誤りがないだろう。苗代に種を蒔くときに、芽吹きの子祝行為として柳の枝が挿し木される。それによって、タブーを背負った神の稲種は、浄化され生命力を回復して苗になる。だから、その斎種の蒔かれる苗代は、特別な空間でなければならないのである。なお、「ゆ(斎)種」という語は、先に引いた日本書紀第九段第二の一書の神話にみえる「斎庭の穂」につながっているだろう。そこでは、アマテラスが育てた聖なる種を意味していたが、ここでは、もっと一般的な「神の種」を指す語として用いられている。そのことは、同じく万葉集の、

斎種(湯種)蒔く新墾あらきの小田を求めむと足結あゆひ出で濡れぬこの川の瀬に (巻七・一一一〇)

という歌が示している。幻想としては、「斎種」は新しく開墾された田に蒔かれなくてはならないのである。斎種を苗に育てる苗代が、始源の田としての「新墾の小田」であるために、この歌では川を遡ってその場所を探すというのである。言うまでもなく、川の上流は異界につながる場所だから、この歌は、理想の苗代を求める歌になる。 V

播磨国風土記には、玉津日女たまつひめ命が生きている鹿を捕まえ腹を割き、その血で種を蒔くと一夜で苗になったという異常成長を語る伝承(讃容郡)と、太水おほみづの神が水を用いず穴し(鹿・猪)の血で田を作ったという伝承(賀毛郡雲潤里うるみ)を載せている。そこに認められるのは、苗代田の水がただの水ではないという認識である。つまり、苗代が神の領域であることの証しが、水に代わる生贄の血だとみればよい。それゆえに、一夜の成長も可能になる。また、同じく賀毛郡の河内里には、草を敷かず稲種を下ろすという伝承がみられるが、それを保証しているのは、巡行してきた神である住吉神とその従神たちであった。他とは異なる苗代を語ることに於いて始源性を保証し、それが苗の成育を約束するのである。

(三浦佑之『神話と歴史叙述』一部改変)

- * 古事記……七一二年に成立した歴史書。上巻には日本の国土生成の神話が記される。以下、本文中にカタカナで記されるのが神話に登場する神々の名前。
- * 高天原……日本神話で、神々が住んだとされる天上の世界。
- * 日本書紀……七二〇年に成立した歴史書。冒頭の神代巻には日本の国土生成の神話が記される。各章段が「正伝」と複数の「別伝」「一書」と呼ばれる)から構成される。
- * 天孫降臨……日本神話で、アマテラスの孫であるニギハヤヒが、国土を治めるために高天原から地上に降りてきたことをいう。
- * 風土記……七一三年に天皇の命を受けて提出された日本諸国の地誌。諸国の産物や伝説などが記される。その国の名によって、「常陸国風土記」「出雲国風土記」などと呼ばれる。

* 夜刀の神伝承……ある人物が開墾した田を献上しようとしたところ、夜刀の神がそれを妨害したため、境を設けて神と人の土地を分け、夜刀の神を祀^{まつ}ったという伝承。

* タブー……社会的に禁止されている事柄や行為。禁忌。

問一 空欄（１）・（２）に当てはまる最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | |
|---|---|----|---|---|----|
| 1 | ア | 懷疑 | 2 | ア | 解消 |
| | イ | 偶発 | | イ | 回復 |
| | ウ | 象徴 | | ウ | 生成 |
| | エ | 普遍 | | エ | 無視 |

問二 傍線部A「いくつもの起源神話」とあるが、古事記に伝えられる起源神話について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア 切り殺されたオホゲツヒメから生まれ出た五穀は、浄化された後にスサノヲによつて地上にもたらされたとしている。

イ 殺された女神から新しい穀物が生まれるという神話は、日本固有ではなく海外から伝わったものと考えられる。

ウ 養蚕も五穀も、殺されたオホゲツヒメの体から生まれ出たという点で同じ起源を持っているということができる。

エ スサノヲのヤマタノヲロチ退治神話は、クシナダヒメとの結婚による稲作の開始を伝える神話であるとも考えられる。

オ ハイヌヴェレ型の穀物起源神話が南太平洋方面から伝えられるとともに、養蚕や農耕が日本に伝えられたと考えられる。

問三 傍線部B「古事記と日本書紀とは、稲作や蚕の起源が別のかたちに展開して伝えられている」とあるが、日本書紀が伝える稲作や蚕の起源神話について述べた次のア―オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア 女神が殺されることでその死体から蚕や五穀の種が誕生するという点では、古事記と同じであると言える。

イ 蚕が死体の眉から生まれたとするのは、頭から生まれたとする古事記と同様に蚕の糸と毛との連想によると考えられる。

ウ 五穀の起源は語られているが養蚕の起源については記されていない点だが、古事記との違いとして挙げられる。

エ 高天原で育てられた稲がニギによって地上にもたらされたことが、日本の稲作の起源とされていると読み取れる。

オ 女神が殺されてから稲作が始まるまでを描く生産起源神話において、昼と夜の起源を伝える神話も語られている。

問四 傍線部C「稲作が、もつとも強く異界と対峙^{たいじ}する行為であった」とあるが、これは稲作のどのような点について述べられているか。次のア―オのうちから最も適切なものを選びなさい。

ア 稲作が、神である自然を破壊することに等しい行為である点。

イ 稲作を伝えた大地の神を人が殺すことで、稲作を手に入れた点。

ウ 稲作が、自然である神の領域に侵入するための祭祀である点。

エ 神が古代律令国家の基盤を支えるために、稲作を広めた点。

オ 稲作では、人の領域を侵犯する神に立ち向かうことになる点。

問五 傍線部D「そこから地上に繁茂することに関しては、次のような神話を見いだすことができる」とあるが、この後に引かれる複数の神話によれば、稲種がどのようなものであって、そこから稲作がどのようなものであることがわかるか。本文中の言葉を用いて六十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部E「苗代における育苗期間は、神のものを人のものにするための試練の期間」とあるが、苗代について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選えらびなさい。

ア 苗代に斎種を蒔くときの種下ろしの儀式で歌われる歌が、万葉集には恋歌として歌われていることが知られる。

イ 苗代に種を蒔くときに、そこを特別な空間とするために柳の枝が挿し木されることがあったと考えられる。

ウ 斎種を苗に育てるためには、異界につながる場所とされる川の上流に苗代を作る必要があったと考えられる。

エ 鹿や猪の血によつて苗が育つたとする伝承からは、苗代が神の領域と認識されていたことが読み取れる。

オ タブーを背負った稲種は、苗代に蒔かれアマテラスに育てられることで聖なる種になると考えられていたことが分かる。

問七 次の一文が入る最も適切な場所を、本文中の i j k l m n o p q r s t u v w x y z のうちから選えらびなさい。

そして、そのような始源をもつからこそ、稲作には、厳重な祭祀が要求されるのである。

Ⅲ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

独立を達成しておよそ半世紀、ラテンアメリカの知識人たちは、我々は果たして西洋人なのかあるいは何人なのかと、自分たちのアイデンティティについて自問しはじめます。北のアンダロス系のアメリカとは違う。西欧で遅れをとったスペインとも違う。自分たちを取り巻く混血大衆とも、「野蛮な」インディオ大衆や黒人とも完全に違う。彼らがゆきついたのは、当時の西欧文化の中心、フランスでした。その頃、ヨーロッパとりわけフランスに i している知識人が多く、フランスに留学する人も多かった。そこに集まった文人たちの間で、初めて「ラテンアメリカ」(América Latina, Latinoamérica) という言葉が生まれます。我々の憧れであるフランス文化、それは広くラテン系の文化だ。その文化に属すラテン系のアメリカなのだ、と。

(1) スペイン人たちは、この名称に素直にはなれない。あそこはあくまでもイベリア半島の我々が文化を築いたアメリカなのだ、ということで「イベロアメリカ (Iberoamérica)」あるいは、イベリア半島の古い名称ヒスパニアにならって、「イスパノアメリカ (Hispanoamérica)」と呼びつづけます。スペイン人を中心とするイエズス会が創設した上智大学には、「イベロアメリカ研究所」がありますね。学科の名前も「スペイン語科」ではなく「イスパニア語学科」です。かつての大阪外国語大学も、スペイン人の外国人教員の影響もあって「イスパニア語学科」でした。一方、カリブ海地域を中心に、ラテンアメリカにはアフリカ系の人たちも多数います。彼らの一部が主張するアフロアメリカ (Afroamérica) という名称もある。さらに先住民の一部は、インディオのアメリカ・インドアメリカ (Indoamérica) という呼称を主張しています。

このように地域を表す名称にも、その地域にかかわる一部の人々の、その時々々の価値観が反映されている。「ラテンアメリカ」という言葉も、どのような価値観をもった人々が発明したのか、また、いかなる時代状況のもとで主張されたのかといった問題が孕まれているのです。ラテンといったとんに、そこに生きるラテン系でない人々の、歴史や文化にかかわる主体性は覆い隠されています。彼らは「土人」「原住民」、「元奴隷の黒人」であり、主軸を成すのはラテン系文化を担う人々なのだ。彼ら「土人」や「原住民」「黒人」は、社会の将来を担うべき構成員ではありえない。(2) ラテンアメリカには、ラテン系文化しかないかのような、あるいはラテン系の文化しか認められないような、そういった偏った価値観が実は含まれているのです。

こうした問題を象徴する具体的な身近な例を、ひとつだけ挙げておきましょう。「ラテンアメリカ文学」というジャンルがありますよね。そこには何が含まれ、何が見落とされているかという問題です。一見して明らかのように、その文学の世界が対象としているのは、スペイン語、ポルトガル語、フランス語で書かれた作品に限られています。a つまり、かつての植民地宗主国の言語

に限定されている。^[b]しかしそれ以外の言語で語られた文学は、ラテンアメリカの大地には無数に存在します。^[c]インカの世界にもマヤの世界にも伝承文学があり、一部は活字化もされている。^[d]でもラテンアメリカ文学という範疇からはすべて切り落とされてしまう。^[e]このように、「ラテンアメリカ文学」という名称そのものにも、すでに一つの価値観が組み込まれているわけです。

こうした名称をめぐ^Aる問題はさらに、日本、日本国民、日本人、日本民族という枠組みとも無関係ではありません。ようやく一九九七年の行政訴訟の判決で、アイヌ民族は先住民族と認定され、日本政府は、日本が単一民族国家とは公的には言えなくなりました。ではアイヌの人々は日本人ですか？ そうであるなら、現在ロシア領に住んでいるアイヌの人々は？ 沖縄はどうでしょう。「琉球処分」の結果として日本領土に強引に組み込まれたという歴史的経緯がある。彼らは日本人？ 日本民族ですか？ それでは、今や四世、五世の時代にはいった日本育ちの「在日」の人々はどうでしょう？ また彼ら自身は、こうした枠組みをどう考えているのでしょうか？

現在地球上に存在するほぼすべての国々には、先住民と呼ばれる人々のほかに、「在日」やアフロ系アメリカ人に代表されるように、そこにしか戻るべき場をもたない多様な人々の集団が無数にいます。そしてそれぞれの国の経済や文化は、そうした集団によって支えられ、あるいはそうした集団との共生によって、現在の豊かさを維持することができた。アメリカは排他的なトランプ大統領に賛同するアメリカ人のみのアメリカで、果たして豊かさを維持できるのか？ 「ヘイトスピーチ」集団が主張するような日本は、一体どこへ向かってゆくのでしょうか？ 経済発展のためには、積極的に外国人労働力を導入してきたヨーロッパ諸国も、その多くは今や排他的な姿勢を強めています。為政者が理想とするドイツ人のドイツを目指したヒトラーの時代が、再来しつつある危険を感じます。国の名称、地域の名称ひとつにも、支配的な文化や集団とは異なる存在を排除する危険性が孕まれているということ、肝に銘じておきたいですね。

さて、このラテンアメリカと名づけられた地域、そこはあまりにも広大で、ひとくくりでは纏^{まと}め切れないⁱⁱに満ちています。南北の長さにしても、太平洋岸の米墨国境の町ティファアナから南米大陸の先端までは、同じティファアナから東京までの距離を大幅に越えます。独立国だけでも三三カ国あり、歴史も文化も人種構成も多岐にわたっています。

そこでまずは、この地域の現在を知るうえで、歴史的特徴を含め基本的な性格を三つに整理し、それぞれの特徴が支配的な地域を「場」として捉えてみたらどうだろうか。歴史を考える上でも文化や社会の実態に接近する上でも、次にご紹介するように、三つの「場」を設定してみると分かりやすいと考えています。

第一の場は、先住民社会の存在を大前提として、植民地社会が成立した空間です。具体的にはメキシコや大半の中米諸国、そしてアンデス地域の国々が含まれます。そこにはかつて定住農耕を

ベースとする大規模な社会が存在していた。北のほうにはアステカ王国が、南のほうにはインカ帝国が。そして、貢納関係を通じて、諸集団を取り結ぶ広大な組織網が成立していました。征服者たちは、アメリカ大陸に到着して驚いた。当時、アステカ王国の首都だったテノチティトラン、現在のメキシコ市、その人口規模に iii する都市は、ヨーロッパでもわずかしかなかったのです。

それだけに、この第一の場に成立する植民地社会は、先住民社会への高い寄生性に特徴づけられることになります。^Bつまりインディオの存在なくしては、植民地社会の成立はありえなかった。一五一九年に始まる大陸部の征服戦自体、すでに征服されていたインディオの兵力が利用されています。征服者の大半は男性でしたから、性欲を満たすためにもインディオ女性に依存する。潤沢な労働力もそこにある。植民地都市の建設にも、大量のインディオの労働力が動員される。食糧の生産も、金銀の開発といった経済活動の労働力も彼らに依存する。

こうした先住民社会への寄生性の強さは、第二の場、第三の場とは明らかに異なります。また、先住民をゴミとして掃き清めていった、「クリアランス」の名で知られる北米の植民地化の過程とも決定的に異なる特徴です。さらにこの寄生性の強さは、第一の場の特徴的な現代につながるさまざまな結果をもたらします。混血人口の急増という社会問題が植民地時代初期から浮上し、その後徐々に混血メステイソの、社会における主体性が高まってゆく。その一方で、数の上でマイノリティである支配者の白人系の人々は、膨大な数の先住民に対し、徹底的な差別化を維持しなければ支配を貫徹できない。そのため、先住民社会に対する人種的差別が延々と固定化・強化されてゆく場でもあります。現代のグアテマラ状況はその典型的な例だといえます。

しかし同時に先住民たちは、社会的・文化的に差別化されたため、そこに自己再生の場を確保できたのも事実です。征服以来五〇〇年を経た現在、第一の場では無数のエスニック集団がそれぞれのアイデンティティを維持できているのも、こうした経緯によるものだといえます。この歴史的経緯はまた、現代の社会変革の様相にも特徴を与えています。歴史のなかで、先住民集団の反乱が幾度となく繰り返され、現代ではボリビアの例のように、粘り強い先住民運動の成果が、インディオの大統領選出につながり、それまで白人系による支配が当たり前だった五〇〇年にわたる植民地的秩序が、大きく揺れ動きはじめた例も現れる。このように第一の場は、大量の被征服者の存在によって、植民地社会、ひいては今日の社会のあり方が逆規定されている場だといえます。

^C第二の場は、一九世紀後半に南イタリアやドイツといったヨーロッパから大量の移民を導入することにより、社会の再編が達成された場です。具体的には南米大陸の南端アルゼンチン、ウルグアイ、チリなどがふくまれます。そこでは、第一の場と異なり、大規模な先住民社会が存在せず、大銀山も発見されなかった。そのため、植民地宗主国にとっても入植者にとっても、長年にわたり魅力に欠けた地域で、宗主国の保護からもっとも隔絶された辺境の空間でした。この周辺一帯の中心

的な都市ブエノス・アイレスも、一応安定した植民地都市として成立するのは一五八〇年。入植者も数百人にすぎず、都市をとりまく広大な「野蠻」への恐怖が、独立後も都市住民の意識をつねに支配していた。つまり、大半の空間が一九世紀後半まで未征服のまま放置されていた場だといえます。

もうひとつの特徴は、スペインの支配力の弱さの隙について、イギリス人を中心に活発化する密貿易を通じて、スペイン以外のヨーロッパとのつながりがいち早く成立していたことです。この地域に到達するためには、カリブ海側からパナマ地峡を渡り太平洋側へ出て、そこからペルーのカジャオへ、さらにペルー副王領の首都リマを経由してアンデス山脈を越える必要がありました。それが一八世紀中ごろまで王権が認可していた正規の貿易ルートでしたが、それではあまりにも効率が悪い。奴隷一人の値段も、ブエノス・アイレスではキューバ島での値段の数倍に膨れ上がっていました。それくらいなら、密貿易者と手を組んだほうがずっと安く済む。こうして、スペイン王の認可とは無関係に安価な黒人奴隷が供給され、その見返りに現在のボリビア、アルト・ペルーの大銀山から、大量の銀が直接イギリスへ流出してゆく結果となります。

第二の場の最後の特徴は、「野蠻」の抹消と大量のヨーロッパ移民の導入です。独立を達成しても、大半の領土は空白のままで、ただ延々と草原地帯（パンパ）が広がっている。入植者を導入しなければ国土を守ることもむずかしい。しかし未征服のままに放置されていた空間には、「野蠻」なインディオが徘徊している。そこで一九世紀後半採られた手段がインディオの絶滅作戦でした。インディオが抹殺された安全な空間に、イタリア・スペイン・ドイツ・東欧系の移民が大量に導入され、徹底的な白人化が実現される。なおインディオの絶滅作戦は、同じ時期、メキシコ北部でも展開されます。植民地時代からはじまる非スペイン系のヨーロッパ諸国とのつながり、インディオの絶滅作戦につづき一九世紀後半にはじまる大量のヨーロッパ移民の到来という要因は、この地域の近代化や今日の政治・思想状況を考える上で無視できない側面です。

最後に第三の場は、征服以前にそこに住んでいた人々が一掃され、ほぼ完全に外来の人々を中心に社会が成立する、人類史のなかでもきわめて特異な空間です。具体的にはカリブ海地域がその典型です。コロンブス一行がはじめて到来した一四九二年からおよそ半世紀、砂金開発の重労働、ヨーロッパからもたらされた疫病の蔓延^{まんえん}、そこに征服者による食糧の収奪も加わって、先住民は絶滅の危機に瀕^{ひん}します。その危機を逃れて、島づたいに逃亡する先住民も相ついだ。大陸部の環カリブ海地域へと逃げ延びた先住民たちもいました。いずれにせよ、征服者たちは利用できる先住民を短期間のうちに失うことになります。

ちょうど同じ頃、砂金開発が底をつき、かといって大銀山も発見されない。そこで主として西アフリカから、はじめはポルトガル人、ついでオランダ、フランス、そして最後にイギリス人の奴隷商をつうじて、大量の黒人奴隷が導入されます。こうして「発見」直後は大陸部の征服の拠点とし

て、ついで大陸部の植民地に奴隷を供給する中継基地として栄え、そして最後に黒人奴隷を基礎とするプランテーション^{*}経済が支配します。その結果、第三の場には支配者としてのヨーロッパ人と、主体性を奪われた黒人奴隷という基本的二重構造が出現します。

この場のもうひとつの特徴は、一七世紀以降、スペイン、ポルトガルに遅れをとった後発ヨーロッパ諸国による争奪の場と化した点にあります。オランダはキュラソーを、イギリスはジャマイカを、フランスはハイチをスペインから奪い、「新大陸」におけるスペイン、ポルトガルの独占権を脅かす。一五六〇年あたりから一六〇〇年代にかけて 相次いで建設された拠点を足がかりに、ブラジル、ベネズエラ、そして一九八一年まで英領ホンジュラスだった現在のベリーズ、さらにメキシコ湾岸のカンペチェあたりへ進出してゆきます。このヨーロッパ諸国の進出は、結果としてもひとつの特徴を産み出します。世界的な人種混交の場の出現です。

一八世紀末から奴隷貿易が衰退し始めるのを機に、ヨーロッパ諸国はすでに支配下においていたアジアの植民地から、黒人奴隷に代わる労働力を投入します。イギリスはインド人を、オランダはインドネシア人を、そして大量の中国人もクーリーとして流入してくる。さらに一九世紀後半には、アメリカ合衆国の解放奴隷の一部も導入されます。こうして第三の場には、世界各地のさまざまな人種が合流し、複雑な混血^Dが生まれていきます。

そして最後の特徴は、ラテンアメリカで最初に独立を達成したハイチを除き、第三の場では独立がもつとも遅れたことにあります。スペインもその他のヨーロッパ列強も最後まで植民地支配にこだわった結果、第一の場、第二の場がともに一九世紀初頭に独立を達成したのに対し、この第三の場では一九六〇年代、アジア・アフリカ諸国の独立の時代を待たねばならなかったのです。

以上、ラテンアメリカを三つの場に分類してみました。現在のそれぞれの国のありよう、人種構成や文化、そして政治を考えるうえでも、何らかの参考になるのではないかと思います。

（清水透『ラテンアメリカ五〇〇年―歴史のトルソー―』一部改変）

* 墨……メキシコの漢字表記（墨西哥）からの略称。

* プランテーション……大規模農園。

問一 空欄（１）・（２）に当てはまる最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | |
|---|---|-----|---|---|------|
| 1 | ア | しかし | 2 | ア | なぜなら |
| | イ | だから | | イ | けれども |
| | ウ | さらに | | ウ | あたかも |
| | エ | つまり | | エ | とりわけ |

問二 空欄 i ⅰ に当てはまる最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

i	ア	幻滅	ii	ア	話題性	iii	ア	追随
	イ	傾倒		イ	多様性		イ	劣後
	ウ	拘泥		ウ	特殊性		ウ	該当
	エ	食傷		エ	画一性		エ	匹敵

問三 傍線部 A「名称をめぐる問題」とあるが、それはどのような問題で、何を引き起こすと筆者は述べているか。本文中の言葉を用いて五十字以内で説明しなさい。

問四 次の一文が入る最も適切な場所を、本文中の a ⅰ e のうちから選びなさい。

その世界はもともと豊かなはずです。

問五 傍線部 B「先住民社会への高い寄生性」によってどのようなことが起こったか。次のア～エのうちから、適切でないものを選びなさい。

- ア 男性を中心とした集団によって征服されたことから、混血人口が急激に増加した。
- イ 先住民蔑視によって、白人が支配する植民地社会からは先住民が排除された。
- ウ 少数派である白人系住民による支配維持のため、先住民への差別が強化された。
- エ 先住民集団は、アイデンティティを継続的に維持する場を確保できるようになった。
- オ 粘り強い先住民運動の結果、ボリビアで先住民の大統領が誕生した。

問六 傍線部C「第二の場」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 第二の場では、大規模の先住民人口や大銀山が存在しなかったことから、一九世紀に至るまでスペインを含めたヨーロッパとのつながりが希薄であった。

イ 第二の場は、地理的にヨーロッパと近いため、一六世紀から大西洋を横断しヨーロッパと直接つながる航路が正規の貿易ルートとして認可されていた。

ウ 第二の場は、長年にわたり魅力に欠けた地域で、小規模の入植者しかいなかったため、スペイン植民地で産出された銀も流通しなかった。

エ 第二の場には、長らく小規模の入植者しかおらず、大半の土地が手つかずのまま放置されていたため、現在も多くの先住民が住む地域となっている。

オ 第二の場では、密貿易を通じてヨーロッパとのつながりが構築されており、のちには大量のヨーロッパ系移民を受け入れたことから、白人化が進んだ。

問七 傍線部D「複雑な混血」が生じるようになった理由として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 支配層となった白人たちによってプランテーション経済が形成され、必要な労働力が世界各地から探し求められたため。

イ マジョリティであるはずの現地先住民を、マイノリティである外来の白人系が労働力として使用するようになったため。

ウ 発見された大銀山を目当てにヨーロッパ各国から白人が押し寄せ、労働力として黒人奴隷を大量に導入したため。

エ 白人入植者がプランテーションを建設し、経営に必要な黒人奴隷を西アフリカから連行してきたことで、先住民と黒人の混血化が進展したため。

オ 「新大陸」進出に遅れをとったヨーロッパ諸国が競って植民地建設を行った結果、多様なヨーロッパ諸国をルーツに持つ白人が増加したため。